様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５２８４０６６

研究課題名（和文）現代東アジア文学史の国際共同研究

研究課題名（英文）The International Joint Research on the History of East Asian Literature

研究代表者
藤井　省三（FUJII, Shozo）

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：７０１５６８１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,200,000円

研究成果の概要（和文）：研究代表者は日本･東アジア･米国の東アジア比較文学研究者16名の連携研究者・研究協力者の協力を得て、平成25年度以来、A.20世紀前半国民国家萌芽期研究班。B.20世紀後半国民国家形成期研究班。C.21世紀東アジアポストモダン期研究班のABC三研究班を組織し、三年にわたりABC順に国際WSを東京大学、北九州市立松本清張記念館、台湾大学台湾文学研究所において開催した後、最終年度には東大で総合的国際シンポを主催した。この研究により、日本・韓国・中国大陸・香港・台湾・シンガポールの東アジア共通の文学史に関する大きな成果を上げた。

研究成果の概要（英文）：Since 2013, the Principal Investigator and his 16 Associate Investigators from Japan, East Asia, and USA majoring in Modern East Asian Literature formed the 3 groups as follows: Group A: germinating period of Nation States in the first half of the twentieth century. Group B: the formative period of Nation States in the second half of the twentieth century. Group C: The post-modern period of East Asia in the twenty-first century. Group A held an international workshop at Tokyo University in 2013, and Group B held one at Taiwan University in 2014, and Group C held one also at Matsumoto Seicho Memorial Museum in Kita-kyushu city in 2015. In the last academic year of our International Joint Research, all of us gathered at Tokyo University to hold an international symposium. This 4 years' Joint Research brought us a huge result on the study of common History of Literature in modern period of Japan, Korea, Mainland China, Hong Kong, Taiwan, Singapore.

研究分野：現代東アジア文学史

キーワード：魯迅　黄皙暎　夏目漱石　芥川龍之介　莫言　也斯　台湾文学　シンガポール文学

１．研究開始当初の背景

(1) 東アジア共通の近現代文学体験：

英仏など西欧諸国では、17 世紀に産業社会化と市場の成熟が国語と出版業を出現させ、口語文学が国民市場を成立させ、19 世紀に“想像の共同体”としての国民国家が誕生した。だが後発の東アジアにとって 20 世紀は国民国家の時代、ポストモダンの 21 世紀は東アジア共同体の時代といえよう。中国で国民国家形成における「国語の文学」の重要性を喝破したのは胡適（こてき、1891-1962）であり、彼は口語文学が国語を創出し、国語による正統的文学こそが標準的国語を産み出すと力説した（1918「建設的文学革命論」）。そして東アジアの作家たちは「文学の国語」を求めて、東アジアの文化都市を巡礼するのであった。

たとえば 19 世紀末年の 1900 年、ロンドン留学途上に上海香港に寄港した夏目漱石（1867～1916）は「文学の国語」前夜の中国を一瞥し、03 年帰国後には「亡国」ならぬ「防国」の文学者を志し日本の「国語の文学」を成熟へと導いた。02 年日本に留学した魯迅は漱石の職業作家への変身に憧れ、06 年医学を棄てて文学運動を開始し、12 年後に文学革命を実現した。彼は 20 年代に森鷗外・芥川龍之介らの影響も受けるが、30 年代以後は東アジア文学に影響を与えた。日本では太宰治（1909-48）、大江健三郎（1935-）、村上春樹（1949-）らが魯迅の強い影響を受け、松本清張（1909-92）は魯迅に激しく反発して私小説作家から推理小説家へと変身し、東アジア推理小説の元祖となった。朝鮮の金史良（キム・サリャン、1914 - 1950）は民族アイデンティティの苦悩を描いた小説で 39 年に芥川賞候補となったが、彼にも魯迅の影響が指摘されている。このような日・中・韓を中心とする東アジア文学の潮流は 20 世紀後半以後も続き、21 世紀ポストモダン期には更にダイナミックに展開している。しかし現代東アジア文学史の研究は、ほとんど行われていなかった。

(2) 現代東アジア文学に関する研究代表者による研究：

1999 年研究代表者（以下「代表者」と略す）が東京大学において開催した国際シンポ「東アジアにおける魯迅の受容」は、世界初の東アジアと魯迅をめぐる比較研究で、韓国・台湾・香港・シンガポール・オーストラリアから 20 名の研究者と日本滞在中の中国人研究者 5 名を招聘して魯迅受容を比較研究した。同シンポをきっかけに東亜現代中国文学国際学会が発足し、ほぼ毎年東アジア各地で大会を開いて昨年までに 11 回を数えている。また代表者は 1980 年代以来、魯迅と漱石、鷗外、芥川、太宰、大江、清張ら日本作家との影響関係の研究を積み重ね、その成果を論文集『魯迅と日本文学』(東京大学出版会 2015)などで公開している。

そのいっぽうで代表者は東アジアと村上との相互影響関係に関し、2005-2008 年度には科研費助成等を得て、東大で国際ワークショップ（以下 WS と略す）を 2007 年に、国際シンポを 2006 年（国際交流基金共催）と 2008 年（東大文学部主催）に開催し、東アジア各地とアメリカの村上春樹研究者を招聘した。その成果は代表者の著書『村上春樹のなかの中国』(朝日新聞社 2007)、共編著『世界は村上春樹をどう読むか』(柴田元幸、沼野充義、四方田犬彦と共編、文藝春秋 2006)、代表者編の論文集『東アジアが読む村上春樹』(若草書房 2009)として公開されている。さらに 2009-2012 年度に科研費助成を受けて国際共同研究「東アジアにおける魯迅阿Q像の系譜」を主催した。2011 年度には松本清張記念館と協力して北九州市で国際シンポ「東アジアにおける松本清張」を開催した。

また代表者は台湾大学台湾文学研究所との合同 WS（2006、2007、2012）、南京大学現代中国文学研究中心との合同 WS（2010、

2011、2012）、米国・コロラド大学アジア言語文化学部での集中講義（2009）など外国の有力研究機関との共同研究体制を強化してきた。

２．研究の目的

魯迅が高く評価したデンマーク人の文学史家ブランデス（1842-1927）著『19 世紀文学主潮』（1890）とは、19 世紀に国民国家体制を確立した仏英独の文学を中心とする欧州文学史であり、その刊行から約 100 年後に EC が成立した。東アジアは一世紀遅れで欧州国民国家形成を追っており、本研究は 10 数年来の国際共同研究を基礎として、日本・中国・韓国において文学が国語・国民国家形成に対して担った重責から、現代における東アジア人アイデンティティ形成に対する作用までの解明を目的とした。

３．研究の方法

(1) 概要

代表者は日本･東アジア･アメリカ各地の現代日本･中国･韓国・台湾・香港比較文学研究者 15 名に連携研究者（以下「連携者」と略す）・研究協力者（以下「協力者」と略す）となることを依頼し、以下の ABC 三つの研究班を組織した。

A.20 世紀前半国民国家萌芽期研究班（以下「A.20 世紀前半研究班」と略す）

B.20 世紀後半国民国家形成期研究班（以下「B.20 世紀後半研究班」と略す）

C.21 世紀東アジアポストモダン期研究班（以下「C.21 世紀期研究班」と略す）

各班は代表者または連携者を班長とし、その調整の下で E メールにより資料や研究成果、相互批評を交換し、平成 25 年度から 27 年度にかけて毎年一班が東京大学（以下「東大」と略す）、台湾大学（以下「台大」と略す）、北九州市立松本清張記念館の順で WS・シンポジウムを開催し、各班員は報告論文を提出して研究の中間報告を行い、全班員で討論を行った。

代表者は平成 28 年度に連携者･協力者全員を東大に招聘して、公開シンポ「現代東アジア文学史の国際共同研究」を開催し、各人による報告と討論を行い、日本の各分野の研究者や市民からのご指教を仰いだ。成果の一部は日本及び東アジア・北米各地の文芸誌学会誌にエッセー･論文として発表して、東アジア･北米の読者のご指教を仰いだいっぽうで、総合的成果として論文集（中国語）を南京師範大学出版社より刊行の予定である。

(2) 各年度の研究の方法

① 平成 25 年度：代表者は連携者・協力者と共に A.20 世紀前半、B.20 世紀後半、C.21 世紀期の三研究班を組織し、A 研究班 WS を東大文学部で開催し、各 A 班員は報告論文を事前に提出し WS で報告して検討しあい、代表者がその成果を他の二班の班員に報告した。ABC 各班の研究テーマと構成メンバーは以下の通りである。

A.20 世紀前半研究班：20 世紀前半国民国家萌芽期における夏目漱石、森鴎外、芥川龍之介らと他地域の文学制度形成との影響関係を担当。東アジアの国民国家萌芽期において、日本の先進的文学者の作品が東アジアの後輩作家に与えた影響を、成長する出版資本主義と都市大衆文化、左翼思想運動との関わりというマクロ的視点から、具体的作品・事件を取り上げて比較研究する。

A.20 世紀前半研究班は以下の代表者と協力者から構成され、氏名前の＊が班長である（以下同）。氏名、国籍、所属、職、役割、専攻の順で列挙する。

＊藤井省三、日本、東大、教授、研究代表者、現代日中比較文学

星野幸代、日本、名古屋大学、教授、連携研究者、現代日中比較文学

島村輝、日本、フェリス女学院大、教授、

研究協力者、現代日本文学
丁帆、中国、南京大学、教授、研究協力者、現代中国文学
王彬彬、中国、南京大学、教授、研究協力者、現代中国文学
呉俊、中国、南京大学、教授、研究協力者、現代中国文学
林敏潔、中国、南京師範大学、教授、研究協力者、現代日中比較文学
金良守、韓国、東国大学、教授、研究協力者、現代中韓比較文学
南富鎮、韓国、静岡大学、教授、研究協力者、現代日韓比較文学
Kleeman, Faye、米国、コロラド大学、副教授、研究協力者、現代日台比較文学
B.20 世紀後半研究班：20 世紀後半国民国家形成期における魯迅と林芙美子、太宰治、大江健三郎、松本清張、村上春樹、莫言、黄晳暎との影響関係、および巴金・張愛玲と白先勇、李昂、李碧華、也斯との影響関係を担当。東アジアの国民国家形成期において、魯迅が日本の戦後文学者の作品に与えた影響を、東アジアにおける民主主義文化および社会主義文化の交流・対立という文化史・思想史の視点および左翼文学・モダニズム文学運動の視点から検証する。出版資本主義と都市大衆文化、左翼思想運動との関わりというマクロ的視点から、具体的作品・事件を取り上げて比較研究する。
B.20 世紀後半研究班は以下の代表者と協力者から構成される。
藤井省三。＊星野幸代。島村輝。
柳原暁子、日本、松本清張記念館、専門学芸員、研究協力者、現代日本文学
丁帆。呉俊。林敏潔。
王成、清華大学、教授、研究協力者、現代日中比較文学
金良守。南富鎮。
張文薫、台湾、台大、副教授、研究協力者、現代日台比較文学
陳国偉、中興大学、助理教授、研究協力者、現代日台比較文学
関詩珮、香港、南洋理工大学、副教授、研究協力者、現代日中比較文学
C.21 世紀期研究班：21 世紀期東アジアポストモダン期における村上春樹、莫言、黄晳暎、白先勇、李昂、李碧華、也斯、董啓章らの受容と変容に関する研究を担当。近代社会が工業生産を主とする社会であるのに対し、ポストモダン社会は情報産業が成長した社会であり、東アジアではおおよそ 1980 年前後に日本が、90 年前後に韓国・台湾・香港が、2000 年前後に中国がポストモダンを迎え、東アジア共通文化が広まったといえよう。これにともない文学の役割は、従来の国民国家想像から、ポストモダン的東アジア共同体の想像へと変容しつつあるともいえよう。
C.21 世紀期研究班は以下の研究代表者、連携研究者と研究協力者から構成される。
藤井省三。＊星野幸代。島村輝。
金良守。南富鎮。張文薫。
張明敏、台湾、健行科技大学、准教授、現代日台比較文学
陳国偉。関詩珮。Kleeman, Faye。

② 平成 26 年度：A.20 世紀前半、B.20 世紀後半、C.21 世紀の三研究班は、前年度に引き続き各担当分野の研究を進め、E メール等により相互に研究成果を報告し、資料を交換した。代表者は台大台湾文学研究所と共催で台北において 9 月 27-29 日に、B.20 世紀後半研究班ワークショップを開催した。

③ 平成 27 年度：研究代表者は、日本・東アジア・米国の現代東アジア比較文学研究者 16 名の連携研究者・研究協力者の協力を得て、平成 25 年度以来の以下の ABC

三つの研究班を維持した。A.20 世紀前半国民国家萌芽期研究班。B.20 世紀後半国民国家形成期研究班。C.21 世紀東アジアポストモダン期研究班。また 8 月 22-24 日に北九州市立松本清張記念館において、C 班による二日間の国際シンポおよび一日の WS を開催した。

④ 平成 28 年度：研究代表者は世界各国 16 名の連携研究者・研究協力者の協力を得て、7 月 29-31 日に東大山上会館において、ABC 三班合同による二日間の国際シンポおよび一日の文化調査を主宰し、25 年度以来の三研究班の研究成果を纏めた。

４．研究成果

本研究では、東アジアにおける国民国家萌芽期、同形成期、ポストモダン期という文学史的時代区分に基づき、東アジア＋アメリカという複眼的視点により各地の代表的作家の重層的な影響関係を解明した上で、現代東アジア文学史の構築を試みた。また研究代表者がこれまで親密に研究交流を行ってきた南京師範大学、台湾大学、北九州市立松本清張記念館と叡智と資金とを出し合って国際 WS・シンポジウムを実施し、論文集刊行を準備した。これにより、日本・中国語圏・韓国など東アジア諸地域の文学が、20 世紀初頭から現代まで相互越境を拡大深化し続けてきた点が明解に実証され、現代東アジア文学史の構想をより現実化することが可能となった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 40 件）

① 島村 輝、〈転形期〉の混沌(カオス)から——小林多喜二と小樽の若き〈マルクス主義〉者たち、昭和文学研究、査読有、74、2017、15-28

② Hoshino, Yukiyo、Use of Dance to Spread Propaganda during the Sino-Japanese War、Athens Journal of History: History Research Unit of the Athens Institute for Education and Research（ギリシア）、査読有、2(3) 、2016、193-198

③ 丁 帆、文学制度与百年文学史、査読有、当代作家評論、査読有、5、4-8

④ 王 彬彬、『白毛女』与訴苦伝統的形成、揚子江評論、査読有、1、22-29

⑤ 呉 俊、魯迅的当下性之議、文学評論、査読有、2、8-10

⑥ 関 詩珮、病源、母体变异及翻译的后延生命——村上春树与谭剑《人形软件》、台湾现代中国文学、査読有、30、2016、5-20

⑦ 張 明敏、影視媒体搶拍《冰点》，国台語攏也通、文訊(台湾台北市)、査読無、374、2016、115-120

⑧ 金 良守、張愛玲與国民国家的問題、中国文学研究、査読有、65 、2016 、95-114

⑨ 南 富鎮、松本清張文学の葉脈——ル・ボン、魯迅、李光洙、本間久雄、木村毅、バーナード・ショーなど、松本清張研究：北九州市立松本清張記念館、査読有、17、2016、130-145

⑩ 柳原 暁子、松本清張と水村美苗の「嵐が丘」体験、松本清張研究、査読有、16、2015、200-223

⑪ 星野 幸代、日中戦争期における植民地出身の舞踊家——崔承喜、蔡瑞月、李彩娥、洌上古典研究、延世大学（韓国）、査読有、47、2015、456－474

⑫ Kleeman, Faye 、 Yuan University of Amsterdam Press、Chain Reactions ——Japanese Colonialism and Global Cosmopolitanism in East Asia.、Gregory Bracken ed., Asian Cities: Colonial to Global、査読有、2015、143-158

⑬ 王 成、阿部知二における中国旅行と文学

表象、『アジア遊学』、2015、査読有、174-184

⑭ 張 文薫、1940 年代台湾日語小説之成立與台北帝国大学、《聚焦台湾——作家、媒介與文学史的連結》、国立台湾大学出版中心、2014 年 6 月、157-192

⑮ 藤井 省三、莫言が描く中国の村の希望と絶望——「花束を抱く女」等の帰郷物語と魯迅および『アンナ・カレーニナ』、文学界、2014、査読無、232-276

⑯ 李 凱琳 論茅盾早期小説中的婦女解放論述與革命意識（1927-1930）、中国文学学報、査読有、5、2014、207-228

⑰ 陳 国偉、李珮琪訳、「歪んだ複写」——1980 年代台湾における松本清張の翻訳と受容、松本清張研究、査読有、14、2013、207-223

⑱ 林 敏潔、松本亀次郎與魯迅、魯迅研究月刊、査読有、8、2013、56-62

〔学会発表〕（計 40 件）

① 藤井　省三、On the representation of Taiwan image in the works of Taiwanese authors in Japanese language after the war: from Qiu Yonghan（邱永漢） to HIGASHIYAMA Akira（東山彰良 or 王震緒）、国際台湾文学研討会、2016 年 5 月 10 日、UCSB、サンタバーバラ（アメリカ）

② 藤井　省三、夏目漱石『哥児』与魯迅「阿Q正伝」之比較研究——以女僕阿清与呉媽的系譜爲輔助線、第 5 届国際魯迅研究会蘇州論壇、2014 年 11 月 21 日、蘇州大学、蘇州（中国）

〔図書〕（計 10 件）

① 藤井　省三、東京大学出版会、魯迅と日本文学——漱石・鴎外から清張・春樹まで、2015、280

② Faye Yuan Kleeman、 ハワイ大学出版会、In Transit: The Formation of an East Asian Cultural Sphere、2014、295

③ 陳 国偉、国立台湾文学館、類型風景：戦後台湾大衆文学、2013、324

６．研究組織

(1)研究代表者

藤井　省三（FUJII, Shozo）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：70156818

(2)連携研究者

星野　幸代（HOSHINO, Yukiyo）

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：00303587